慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『詩本義』に見られる欧陽脩の比喩説：伝箋正義との比較という視座で
Sub Title	Analyses of the use of metaphors by Ou Yangxiu in his book "Shi benyi"
Author	種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.104- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0104

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『詩本義』に見られる欧陽脩の比喩説

――伝箋正義との比較という視座で――

種村　和史

Ⅰ　問題の所在

宋代詩経学の幕開けとなった欧陽脩の『詩本義』については、宋代から現代に至るまで様々な角度から評論・研究が行われ[1]、その解釈理念・学問的特徴・学術史的意義を明らかにする努力が続けられてきた。詩序・毛伝・鄭箋という漢唐以来の詩経解釈の権威とされてきた経説に対する本格的な批判や、人間の本性の不変性についての楽観的な信頼の上に立ち、平易で常識を重んじた解釈を志向した、いわゆる「人情」説などは、『詩本義』の性格をよく表すものとしてしばしば挙げられるものである。

ところで、「毛詩大序」に詩の六義として風・雅・頌と並列されている賦・比・興は、長い間、詩経を代表する修辞技法として重んじられ、その内容（とりわけ興の内容）をめぐって古来様々な議論が戦わされ、優に一個の学説史を形成している。欧陽脩については、江口尚純氏[2]や蔣立甫氏[3]により彼の比喩に関する言説が抽出されているものの、いまだ

総合的な考察は行われていない。そのため彼の比喩論が、彼以前の学説から何を受け継ぎ、何が異なるか、彼以後の詩経学の展開にどのような影響を与えたかは明らかにされていない。本稿は、先学の研究成果を踏まえながら欧陽脩の比喩説の全体像を解明し、詩経学の流れの中に位置づけることを目指す。

南宋の朱熹が漢唐の詩経学とは大きく異なる賦比興論を展開したことは周知の事実であるが、これについては近年、莫礪鋒氏[4]と檀作文氏[5]がそれぞれ詳細な分析を行い、その具体的な様相を明らかにしている。本稿が考察する問題は、漢唐の詩経学と朱熹の詩経学の間の空隙を埋め、朱熹の比喩論がどのようにして成立したかを考える基礎資料を提供するものと考えられる。

『詩本義』は四部叢刊広篇景印呉県潘氏滂熹斎蔵宋刊本を用い、引用の所在は必要に応じて、巻数、「篇名」、論／本義[6]の要領で示す。詩序および毛伝・鄭箋・正義（以下「伝箋正義」と略称）は十三経注疏整理本『毛詩正義』[7]に拠る。紙幅の都合により、引用文は訓読か訳のみを示す。なお、引用中〔〕で翻訳上必要と思われる補充語句を補った。

Ⅱ　賦比興の枠組みに対する認識

まず、賦比興という詩経の修辞技法の三つの枠組みについての欧陽脩の認識を問題にしたい。

『詩本義』中で、修辞用語として「賦」の用例は見出せないが、「詩人　物を取りて比と為すは、刺美する所に比するのみ。己の事を陳ぶるに至りては以て直述すべし」（王風「采葛」論）と言っているので、直叙（「直述」）を比喩（「比」）に並ぶ修辞法として認識していたことがわかる。この「直述」が六義の「賦」にあたるものと考えられる。

一方、比喩の下位分類として「比」「興」とを並立させる伝統的な認識をどう評価していたであろうか。『詩本義』中

には「比」「興」の語は散見するが、この二語の定義はなく、しかも召南「鵲巣」論のように二者が意図的に混用された例もある。

拙鳥〔鳩〕自ら巣を営む能わずして鵲の成せる巣に居る者有り、以て興と為す爾。……古の詩人は物を取りて比興するに、但だ其の一義を取りて以て意を喩うるのみ。此の「鵲巣」の義は、詩人但だ鵲の巣を営むや功を用いること多きを取りて、以て周室行いを積み功を累ねて以て王業を成すに比す。鳩鵲の成せし巣に居る、以て夫人起家して来たり、已に成れるの周室に居るに比する爾。其の云う所以の意は、以て夫人来たりて其の位に居る、当に周室創業の積累の艱難を思いて以て君子を輔佐し、共に守りて失わざるべきことを興する也。

一つの論の中に、「比」「興」が併用され、さらに二字が合成された「比興」という語も出現することから、欧陽脩は比と興とを並立する概念とはとらえていないことがわかる。

ただし、右の引用から欧陽脩が比と興との概念をどのように把握していたかはある程度推測できる。「比」の語は、「……を取りて、以て……に比す」というように、比喩として用いられる事物や情景にどのような意味が込められているかを説明する場合に用いられる。つまり、「比」は「比喩 ↔ 比喩の意味」という一対一対応の関係を表している。一方、「興」は、「其の云う所以の意は、以て……を興する也」というように、個別の比喩表現が組み合わされてできている一種の文脈を持った表現の言わんとするところを説明する時に用いられることが多い。[8] つまり欧陽脩は、比と興とを並立する修辞技法ではなく、興の中に比が包含されるという、上位下位の概念として把握していると思われる。

しかし、これらの語の分布状況を見ると、「興」は国風、「比」は国風・小雅に偏っている[9]ので、欧陽脩がこれらを詩経解釈の術語として系統的に用いていたとは言い難い。この点、「欧陽脩の比と興との区別は必ずしも厳密ではなかった[10]」という江口氏の指摘は正しい。さらに、『詩本義』中で比喩を説明する際には、上記の三語と合わせて「喩」「譬」「譬喩」などの語が全書を通じて現れる。以上のことから、欧陽脩は比喩を比と興とに分類する伝統的思考には従わず、直叙（賦）と比喩（比興）という、より包括的な二項対立によって詩経の修辞技法を分析しようとしていたと考えられる。

Ⅲ　比喩の意義に対する認識

先に『詩本義』では「賦」という語を修辞技法を表す術語としては用いていないことを指摘した。しかし、これは欧陽脩が修辞法としての直叙を軽視したことを意味するわけではない。王風「采葛」の論に、

詩人が事物を取り上げて比として用いるのは、諷刺したり賛美したりする対象に比すためなのである。自分のことを自述する場合には直叙すればよいのであり、何も婉曲的に他の事物を用いて表現する必要などはないのである。

と言うように、彼は比喩と並ぶ修辞法として直叙を重視していた。これは、欧陽脩が詩句を比喩として解釈することの危険性を認識していたことによる。魯頌「有駜（ゆうひつ）」を例にとろう。この詩の「駜たる有り駜たる有り、駜たる彼の乗黄あり」について、毛伝は「駜は馬肥えて強き貌（さま）なり」と字義の訓詁を示し馬の状態を説明し、「馬肥えて強ければ則ち

能く高きに升り遠きに進む」と馬の状態からその能力を推し量った後、一転して「臣強く力あれば則ち能く国を安んず」と、馬が肥え太って力が強い＝臣下が強力であるという詩句の裏に込められた比喩を見出す。鄭箋はさらに、「此れ僖公の臣を用いるには必ず先ず其の祿食を致すことを喩う」と、視点を君主側に転換して、臣下が強力なのは君主が臣下を手厚く養っているからだと推論し、そこから「祿食足りて臣其の忠を尽くさざるは莫し」と道徳的な教訓を見出していく。

伝から箋へと詩の原意に次々と意味が付加されているが、その過程で比喩解釈が大きな役割を果たしていること、その目的が道徳的な教訓を導き出すことにあったことがわかる。比喩の解読は、解釈の過剰化をもたらす危険性をはらんでいるのである。

本文に即した詩解釈を重んじた欧陽脩は、意味の過剰化をもたらす比喩解釈の手法に反対し、伝箋の説を「皆な詩文に無き所。此れ又妄りに詩人を意いて委曲して説を為す。故に詩の義を失うこと愈いよ遠きなり」と批判し、「詩に拠れば但だ乗馬の肥強なるを述ぶる爾」（巻十二）と直叙として解釈し、無理に比喩を読み取らない姿勢を明らかにする。ここから、欧陽脩が直叙という修辞法の役割を正当に評価し、逆に詩における比喩の役割を限定的にとらえていたことがわかる。

欧陽脩は、詩人が比喩を用いる場合を次のように説明する。

> いったい詩人が事物を用いて比興とするのは、本来、明らかにし難い思いがあって、他の事物を借り用いてその思いを表現するのである（鄘風「牆有茨」論）

いったい詩人は、本来明らかにし難い思いがあるので、それで事物を借り用いて思いを表現するのである。[11]（毛鄭の）「彤管」の説の如きはいかにしても意味が通じない。これでは詩人はそれを借り用いて何の思いを明らかにできるというのであろうか（邶風「静女」論）

ここから彼の次の二つの認識を見ることができる。

①比喩は作者の意図をより明瞭に表現するために用いられる以上、比喩を解釈することによって詩の意味は簡潔でわかりやすいものにならなければならない。したがって、比喩解釈によって往々にして文脈が混乱しかえって意味が難解になってしまいがちな伝箋正義の方法論は批判されなければならない。

②比喩は、詩人の「言い表しがたい思い」を表現するためのものである。したがって、「思い」ではなく「教訓」を読みとろうとする伝箋正義の比喩解釈は批判されるべきである。教訓を読みとるための比喩解釈から詩人の思いを読みとるための比喩解釈へと態度を転換している。

これから考えると、欧陽脩が詩経の修辞法を考える時、賦比興という伝統的な三分法に従わず直叙―比喩という二分法をとったのも、比・興の機能についての認識が未熟だったためだけとはいえず、より積極的な意味があったと推測できる。鄭玄の「比は今の失を見（あらわ）し、敢えて斥言（せきげん）せず……、興は今の美を見（あらわ）し、媚諛を嫌う」（『周礼』「太師」注）という定義では、比興は単なる修辞技法ではなく、「美」「刺」という政治的道徳的な論評性と深く結びついたものとして認識されていた。この立場に立てば、比喩には「教訓」を読みとらなければならなくなる。一方、比興に対するもう一つの代表的な見解「比は顕（あら）わにして興は隠なり」（毛詩大序「故詩有六義焉…」正義）の立場をとっても、興の隠された

意味を探るために過剰な解読をして、難解な解釈や「教訓」的な解釈に陥ってしまう恐れがある。このように、伝統的な比興定義は、政治的・道徳的な論評と過剰解釈とを導きやすいものであり、「経義は固より常に簡直明白」（鄘風「相鼠」論）であるという信念を持つ欧陽脩にとって受け入れがたいものであった。先に引用した王風「采葛」論の「詩人　物を取りて比と為すは、刺美する所に比するのみ」は鄭玄の比興説に相似しているが、『詩本義』中の比喩解釈を見ると、鄭箋のように超然とした論評を読みとるというよりは、やはり詩人の感情が強くこめられた諷刺や賛美を読みとるという性格が強い。彼は、解釈の剰余物を取り除き、詩人の「思い」が込められた純粋な比喩表現としての意味を探求していくために、あえて比と興とを区別することなく、大まかな概念把握のもとに比喩を解釈していこうとしたのだと考えられる。

Ⅳ　詩全体との整合性を重視した比喩解釈

それでは比喩を実際に解釈する際に、欧陽脩はどのような態度をもって臨んでいたであろうか。江口氏・蔣氏の所論に基づきつつ、方法論の体系における位置・歴史的意義を考えながら見ていこう。まず、蔣氏が指摘するように、文脈から総合的に比喩を考えていく態度がある。(12)

> 且つ詩の比興は必ず須らく上下文を成して以て相発明して、乃ち推拠すべし。今若し独だ一句を用いて上下の文理を以て之を推さざれば、何を以てか詩人の意を見さん（巻七、小雅「斯干」論）

詩の刺美する所は、或いは物を取りて以て喩えと為せば、則ち必ず先ず其の物を道い、次いで刺美する所の事を

言う者多し矣（巻六、小雅「鴻雁」論）[13]

これは、鄭箋が文脈全体の意味を無視して句ごとに比喩を解釈していることを批判したものである。「鴻雁」を例にすれば、この詩の「鴻雁于き飛ぶ、肅肅たる其の羽」という二句は、下の「之の子于き征く、野に劬労す」の二句の比喩として用いられており、故に「鴻雁」は「之の子」の比喩である、と欧陽脩は考える。一方鄭玄は、この二句は鴻雁の陰を避けて陽に就くことを知る性質に喩えて、民は有徳の君主に就くものであるということを言っているのであり、下の句の「之の子」は侯伯卿士の職にかなえる者を指したものである、と章の前半と後半を別個に解釈する。それを欧陽脩は、上下の文の関連性を無視した解釈であると批判する。ここには、鄭玄と欧陽脩の比喩解釈の射程の違いがよく表れている。鄭玄は比喩句それ自体で比喩―意味の関係を完結させようとするのに対し、欧陽脩は比喩句の意味をその他の詩句と関連させて考えようとしている。檀作文氏は、伝箋正義が興句のみで解釈を完結させようとするのに対し、朱熹が興とは興句と下文との関係の中に立ち現れてくるものだという認識を持って解釈をしたと指摘するが、[14] この例は檀氏の伝箋正義についての分析の正しさを証明するものであると同時に、欧陽脩にも朱熹と同様の認識があったことを示し、ここに両者の間の学的継承関係を窺うことができる。

比喩句とその他の句、あるいは詩全体との関係を重視する態度は、次のような解釈の方法論を導き出している。

鼠は穴の中に生活する動物なので、詩人は高位の人に喩えたりはしない。もともと詩中で「礼儀を知らない」と刺っているのだから、〔その上〕鼠が食べ物を盗むことに喩えたりなどするはずがない（鄘風「相鼠」論）

詩人は類似点に注目して事物をたとえに用いて、比喩が得意である。〔毛伝に言う〕斧で礼に喩えるなどは、比喩が詩意にふさわしくない（豳風「破斧」論）

〔鄭箋で文王が国王になる前に木こりをしたというが〕「伐木」は、文王を称えた雅である。……木を切るのは、身分の低い庶民の仕事であり、文王の詩にふさわしくない。……文王を詠ったこの詩は、およそ人はみな友あってこそ一人前になるということを万人の教えとして言っているとはいえ、天子諸侯のことを詩に詠って、そこから身分の低い庶民のことにも言い及ぶというのならわかるが、もしこの詩が〔伝箋の説のように〕毎章、木こりのことを詠っているのだとしたら、身分の低い庶民の仕事を主題としていることになり、文王を詠った詩とは言えなくなってしまう（巻六、小雅「伐木」論）

欧陽脩は、比喩として用いる事物は単に類似点があるだけではなく、比喩されるものや詩の主題に見合ったものでなければならないと考え、「相鼠」「破斧」については比喩とは取らず、「伐木」は不詳としている。これは、詩の文脈から比喩の意味を考えていく姿勢に基づく方法論である。

ところで、比喩と比喩されるものとの間に意味的類比以上の対応関係を求める考え方は、正義にもある。邶風「凱風」の「睍睆（けんかん）たる黄鳥あり、載（すなわ）ち其の音を好（よ）くす」の箋に「『睍睆』は〔孝子の〕顔色を和らげている様を興する。『其の音を好くす』とは〔孝子の〕言葉遣いがもの柔らかな様を興する」と言うのに対して正義が、

興は必ず類を以てす、睍睆は是れ好き貌、故に顔色を興する也。音声は猶お言語のごとし、故に辞令を興する也。

と言う。「興は必ず類を以てす」とは、単に「美しい」という点が対応しているだけではなく、この詩で言えば、鳥の姿→孝子の顔つき（視覚的事象）、鳥の声→孝子の言葉遣い（聴覚的事象）、と五感の上でも対応しているというように、興は興されるものと類縁関係がある事物を用いるという指摘である。[15] 比喩は比喩されるものにふさわしいものを用いると考える点で、欧陽脩と相似する。

ただし、両者はその基本的態度において大きな違いが見られる。正義が問題にしているのは、比喩とその裏に込められた意味とが対応しているか否かということであり、詩全体との関係は問題にしないミクロな視点である。正義が対応を求めるのは興句とその内部の意味に限定され、その外部には広がらない。この詩でなぜ鳥が比喩として用いられているのか、その必然性を考える観点はそこにはない。欧陽脩のように、比喩に用いる事物が詩全体で詠われている内容とどう関わるかという、詩全体を視野に入れた見方はなく、あくまで修辞的な比喩の説明に止まっているのである。

V　比興は事物の一端を取る

周南「関雎」の首章「関関たる雎鳩は、河の洲に在り」の毛伝に、「興也。関関は和げる声也。雎鳩は王雎也。鳥の摯にして別有るなり」と言うが、それについて鄭箋は、「摯の言は至也。王雎の鳥、雌雄情意至れり、然れども別有るを謂う」と解説する。文王の后大姒（たいじ）の淑徳を称える詩に「摯（獪猛である）」のイメージが現れるのはおかしいと考え、「摯」を「至」に読み替え解釈したのである。欧陽脩は、鄭箋を曲解だと批判し、毛伝の「摯」は本来の字義通り「獪猛」の意味で使っていると主張する。そして、イメージの齟齬という問題については次のように説明する。

「詩人は本来、后妃の淑善の美徳を歌っているというのに、かえって獰猛な鳥を比喩に用いるというのはおかしいではないか」と言う人があれば、それに対して私は「詩人は雎鳩の獰猛な性質を無視して、ただその雌雄の別れて暮らすところにのみ注目したのである。雎鳩が河の中洲にいて、その声を聴けばなごやかで、その様子を見れば雌雄別れて暮らしている、これが詩人が比喩として用いたものである」と答えよう（「関雎」論）

欧陽脩は、毛伝に「摯」と言うのは詩人がこの鳥に託した「夫婦 別有り」というイメージを解説するついでに、この鳥の持つ別の特徴である「獰猛さ」についていわば博物学的な興味から付言しただけであり、比喩として用いられていると言っているわけではないと考える。この考え方は、召南「鵲巣」論で具体的に説明されている。

いにしえの詩人が事物を喩えに使うときには、その一つの特徴のみに目をつけて喩えにするのである（古之詩人取物比興、但取其一義以喩意爾）

事物を比喩として用いる場合、それをどのような側面からとらえ、どのような点から評価するかは詩人の選択に任されているのであり、比喩に用いる事物が比喩されているものと全面的に対応しているわけではない、それを全面的に対応させようとするところに解釈の無理が生ずる、解釈者は詩人が事物をどの側面からとらえているかを見極めて解釈を行わなくてはならない、と考えるのである。曹風「鳲鳩」論ではこの考えに基づき、やや極端な議論が展開される。[16]

欧陽脩は「不壹を刺(そし)るなり。在位君子無し、心を用ふることの壹ならざるなり」という詩序に基づき、この詩を為政者が公室に忠誠を尽くさないことを諷刺したものと考える。ところがこの詩で比喩として詠われているのは、朝には上の枝から下の枝に、暮れには下の枝から上の枝にと、七羽の雛に餌を与えるために飛びまわり続け、雛が巣立ってもなおその身を案じ続ける慈愛深い鳲鳩の母鳥の姿であり、イメージが齟齬している。そのため『正義』では、母鳥の子を思う様が「均一の徳」を表していて、それによって今の為政者のしからぬことを諷刺しているのだと解するのだが、欧陽脩はそれでは興が詩序と矛盾すると退け(17)、その上で次のように言う。

だから、鳲鳩が雛に餌を与える時には、朝には上の巣の雛から下の巣の雛という順に与え、それでは下の雛の餌が足りないのではないかと思い返して、暮には下から上へと与え、するとまた今度は上の雛の餌が足りないのではと思い返して、またもや次には上から下へと与える。母鳥の子育ての苦労はかくのごとくであり、これが序に言う「用心の一ならざる」さまである。雛鳥が成長し他の木へと飛び去ってしまっても、母鳥の心は依然として雛鳥のことばかり心配しているので、その身は桑にありながら心は子を思って、子が梅に在れば母の心も梅に、棘に在れば心は棘に、榛に在れば心は榛に、というように子に従って移っていくのである。これまた「用心の一ならざる」さまである。

鳲鳩の母鳥の愛情の美しさは捨象して、子を思う故に千々に乱れる母心の「一ならざる」さまを、為政者の私利に走って公室に心を「一にしない」さまに喩えると解釈するのである。

このように欧陽脩は、詩人は比喩に用いられている事物の属性のうちの一つに目をつけて用いているにすぎないのだ、という考えに立って合理的な比喩解釈を提示しようとする。「関雎」の解釈が従来の解釈に比べて説得力を持っていることからわかるように、この比喩論は古注を越えて詩の実相に迫るための大きな武器として機能している。「鳲鳩」では、イメージの喚起力を全く無視して比喩を解釈しているので、いささか理論が先走った印象があり説得的な論とはいえないが、それゆえにかえって、欧陽脩がこの解釈理論に自信を持って駆使していたことがわかる。以上の点は、江口氏・蔣氏がともに注目しているように、欧陽脩の比喩論の大きな成果と言える。[18]

ところで、右の比喩説に似た考え方はすでに『正義』にも見られる。大雅「巻阿」の「巻たること有るは阿なり、飄風 南自(よ)りす」の鄭箋「大陵の巻然として曲れる有り。迴風 長養の方より来入す。興は王 当に体を屈し以て賢者を待つべく、賢者 則ち猥(しき)りに来りて就くこと、飄風の曲阿に入るが如く然り、其の来るは民を長養せんが為なるに喩う」に対する正義に次のように言う。

つむじ風は別に決まった所からやってくるわけではないが、「南よりす」という言葉で説明しているので、この詩では南に意味を持たせていることは明らかである。故に南が物を養い育てる方角なので、賢者がものを養い育てる徳があることに喩えていることがわかるので、それが民を養い育てるためにやってきたといっているのである。檜風「匪風」に「匪風 飄たり兮」と言い、小雅「何人斯」に「其れ飄風を為(す)る」と言う。それらはどちらも「南よりす」と言っていないので、だから「悪いもの」としているのがわかる。これに対して、本詩では「養い育てる方角から来る」と言っているので善いものに喩えているのがわかる。興はそれぞれ個別の現象を取りあげるのであ

り（興取一象）、同じ事物を用いた比喩をみな同じ意味に解釈できるわけではない。ここでは賢人が素早くやってくることを言うので、疾風を喩えにしているのである。

『正義』の「興は一象を取る」とは、詩人が喩えとして用いた事物は多義的であり、詩ではそのうちの一つの意味を選択して用いるので、それ以外の、詩の文脈に沿わない意味（＝イメージ）にとらわれるべきではない、という認識である。[19] 周南「巻耳」の「巻耳を采り采る、頃筐に盈たず」の毛伝「憂える者の興也。采采とは采ることを事とする也」に対する正義にも次のように言う。

「興也」と言わずに「憂者の興」と言うのは、他の興と異なるところがあるのを明らかにするのである。他の詩で興を説明する時、「采菜」と言っていればそれは菜を採ることを喩えにするのであり、「生長」と言っていればそれは生長することを喩えにするのである。この詩では「采菜」と言いながら〔菜を摘む女の〕憂えるさまを喩えとして使っているので、だから特に「憂者の興」と言っているのである。つまりその憂いを喩えにしているだけで「菜を采る」ことを喩えにしているわけではないと言うのである。「采ることを事とす」と言うのは、この菜を摘む仕事につとめ励んでいるということである。この詩と「芣苢」とはどちらも「采采」と言うが、「芣苢」の伝では「一に非ざるの辞」と言い、この詩と異なっているのは、この詩では憂えるさまを喩えとして使っていて、つまり「采菜」の仕事にいくら励んでも小籠にいっぱいにならないのでたいへん心配していることを言っているのであり、だから「之を采るを事とす」と言うのである。「芣苢」の方は婦人が子供ができることを願っている詩なので、

詩中で菜がたくさん摘まれているだろうことは明らかであり、だから「一に非ざるの辞」と言っているのである。

これらの例からわかるように、『正義』にも、ある比喩が意味しうるところは多様であること、詩人はその中の一つの意味を選択して用いるのだ、という認識がある。比喩の多義性という点において、欧陽脩の比喩論との関連性を認めることができる。

両者の比喩論は、いずれも『文心雕龍』比興篇の、

たとえば『関雎』の雎鳩は折り目正しい鳥であるところから、后妃の徳の高さが比喩され、『鵲巣』の鳩には操の正しさがあるから、君主の夫人の貞節がそこに象徴される。いまここでは操の正しさを問題にしているのだから、鳩という凡鳥についてあれこれかかずらう必要はなく、折り目正しいという徳が大切なのだから、雎鳩がぶかっこうな猛禽であってもいっこうかまわないのである（興膳宏氏訳）[20]

の影響を受けたものと考えられる。したがって、欧陽脩の認識はその淵源を古くまでさかのぼることができる。[21]

しかし、同じく「比喩の意味は多様である」と言っても、欧陽脩と正義の比喩論には大きな相違点がある。『正義』における比喩の多様性の認識とは、同じ事物を用いた詩句が、なぜ複数の詩篇中で互いに異なった意味を表すのかを説明するためにある。それに対し欧陽脩においては、比喩として用いる事物のどこに詩人が目をつけているかを見極めることに重点が置かれている。

この相違は、両者の詩経学の指向するところの違いに由来する。『正義』の比喩論は、鄭箋を説明するために用いられている。すなわち、鄭箋が同じ事物の喩えを複数の詩で異なった意味に解釈していることを合理的に説明するためにその比喩論は用いられている。それに対し欧陽脩の比喩論は詩の本義を解明するために用いられている。すなわち、序伝箋における牽強付会な（と彼が考える）詩解釈を批判し、より合理的な解釈を提示するためにこの比喩論を用いている。これを歴史的文脈で言えば、欧陽脩は漢唐の詩経学の権威にとらわれず、詩の本義を独自に追究したことにより、『正義』で部分的にしか用いられなかった比喩論の可能性を全面的に開花させることができたことになる。

Ⅵ　作詩の過程の追体験

ところで、Ⅴで引用した周南「関雎」論の中で欧陽脩は、獰猛な鳥を淑女を賛美する詩に用いるのはおかしいという批判に対して、「比興は事物の一端を取る」という理論で答えていた。ここで批判者が用いているのは、Ⅳで検討した「比喩は詩全体にふさわしいものを用いる」という考え方である。したがって、欧陽脩は自分の比喩説の一つに基づく批判にもう一つの比喩説で反論していることになる。つまりこのままでは、「比喩は詩全体にふさわしいものを用いる」と「比興は事物の一端を取る」という二つの比喩説は両立できないことになってしまう。彼はいかにしてこの二つの理論の間に整合性を確保するのであろうか。

この二つの理論の溝を埋めるものと考えられるのが、詩人が実際に目にしているものを比喩に用いるという指摘である。「関雎」本義に、「詩人は雎鳩の雌雄が川の中洲の上にいるのを見て、その鳴き声を聴き、……」と言い、詩人が雎鳩の様子を実見していることが強調されている。詩人が実見して詩興を駆り立てられたもの、それを詩人は比喩として

使うと考えるのである。詩人がそこから詩を発想したものを比喩として用いる以上、当然、詩全体と比喩とは内容的に深く結びついたものということになる。一方、詩人が興趣を覚えたものということならば、それは事物の一面（「関雎」では雌雄が別れて暮らす様子）だけでかまわないわけである。詩人は事物を直観的にとらえるのであり、詩人の目に映らなかった事物の全体像・全属性を改めて吟味してから比喩に用いるわけではないので、事物が全面的に詩の内容にふさわしいかどうかは問題にはならない。詩人の視点という考え方を導入することで、先の二つの理論の間の矛盾は解消される。

天がものを濡らし潤すのは、雨とか雪とかあるいは泉から溢れた水とか、様々な種類がある。それなのにこの詩でただ「露」だけを言っているのは、露は夜降りるものだからである。作者が夜飲んでいたので身近なものをとって比喩に用いたのである（巻六、小雅「湛露」論）

ここでも、詩の比喩はただ比喩されるものとの類似性のみが問題なのではなく、それが詩人が作詩している情況と何か必然的な関わりを持つことが重要なのだという考え方が見られる。振り返ってみれば、比喩が詩全体とマッチしていないといって伝箋正義の説を批判した欧陽脩の説をⅣで引用したが、それらはみな、鼠―高位の人、斧―礼儀、木こり―文王と、いずれも視覚的印象の不適合を問題にしたものであった。そのような事物を見て当該詩を発想するはずがないという判断があったものと思われ、ここからも、欧陽脩の比喩論が詩人が実見したかどうかを重視していたことが裏付けられる。つまり欧陽脩は、詩の比喩は単に類似性によってAをBに言い換える修辞上の役割以上に、詩人が詩

を発想する源としての意味を持つと考えていたのである。これは、別の見方をすれば、従来のように「比喩――比喩の意味」を解明する以外に、比喩の解釈を通して詩人の詩作の情況を追体験しようという態度と言うことができる。

欧陽脩のこの説は、「興」という言葉の持つ「起興」、つまり詩を詠い起こすという面を重視したものである。もちろん、「興」が「起興」の意味を持つという考え方は、欧陽脩以前の学者にもあった。[22] しかし、これまでも見たように、詩の解釈を解釈する時には、欧陽脩以前の学者は興の比喩としての意味を解明するのに急で、興が詩想といかに関わっているか、興のイメージが詩全体においていかなる役割を果たしているかについての考察はほとんど行われていなかった。詩人の立脚点を考慮に入れた比喩という考え方は、認識としては存在しながらも現実の解釈方法には応用されないままであった。この意味で欧陽脩は、詩経の比喩解釈に新たな展開をもたらしたということができる。

Ⅶ　欧陽脩の比喩説の位置

欧陽脩は、なぜこのような比喩論を構築できたのであろうか。

本稿でも何度か触れてきたように、欧陽脩の比喩論は概念的には、正義をはじめとする彼以前の詩経研究の中でも言及されているものが多い。その意味では、欧陽脩は漢唐の詩経学を継承する部分が大きいということができる。[23] しかし彼の先人たちは、それらの認識を詩経解釈に充分に応用することはできなかった。漢唐の詩経学では、詩序・毛伝・鄭箋という権威的な解釈がありその枠内で、それを敷衍するという形でしか研究が行われなかった。そのため学者が新たな解釈理念を発見しても、本文理解のための理論ではなく、伝箋合理化のための理論としてのみ用いていた。一言で言えば、解釈理念・方法論の発展に研究態度が追いついていなかった。

これに対し、そのような権威の束縛を脱した欧陽脩は、それらの諸概念を独自の比喩論にまとめ上げ、詩そのものを解釈するために自在に用いることができた。本格的な展開という意味で、欧陽脩はやはり先駆者の位置に立つ。

伝箋正義が部分的にしか展開できなかったさらなる理由として、ⅣとⅤで指摘したようにそれらが比喩と比喩される意味との関係のみにしか関心を持っていなかったことが挙げられる。檀氏が指摘するように、伝箋正義においては比喩は全体から切り離されたものとしてのみ解釈されているのである。それに対して、これまでに挙げた例からわかるように欧陽脩には詩を一個の全体としてとらえるという態度が強くあった。比喩句についても、それが詩全体のなかでどういう存在意義を持っているのかを考えながらその意味を解明しようとしていた。[24] このことが彼の比喩解釈を単なる意味の解読の次元を越えて、文学的意義を追求するものにした理由と考えられる。Ⅲで見たように、欧陽脩は比喩表現に教訓ではなく、作者の思いの表白を読み取ろうとしたのである。

このような考え方を導いたのは、彼の詩経観である。彼は、詩経の詩人達の性格は貴賤・賢不肖、一様ではなく、内容的に雑駁なものを含むと考えていた。[25] また、彼は詩経の詩を「古詩」という一般的な概念に含めて認識し、思いが深ければ技巧は単純になると考えていた。[26] つまり、欧陽脩は詩経の詩とは様々な人々の様々な深い思いが素朴な表現の中に詠われていると考えていたのである。したがって、詩に過剰な教訓的意味を求める伝箋の解釈態度は受け入れがたいものとなる。

ところで、詩経は経典であり、詩経研究は経学の一部である。欧陽脩にあっては、詩経は古詩であるという認識と詩経は経書であるという認識とはどのようにして両立するのであろうか。欧陽脩は、詩経成立過程における孔子の役割を重視していた。孔子が三千篇の中から三百篇を厳選し、また必要とあれば自ら改編の手を加えており、そのことによっ

て、はじめて詩経は道徳の書としての価値を付与されていると欧陽脩は考える。これを裏返せば、孔子が手を加える前の詩経の原テキストは非常に素朴なものであることが許されることになる。彼は『詩本義』「本末論」において、詩経には「詩人の意」「太師の職」「聖人の志」「経師の業」の四つの層があり、「詩人の意」「聖人の志」こそが学者が追求すべき「本」だという説を展開する。従来の研究では「詩人の意」と「聖人の志」は、同次元のものとして扱われがちであったが、右のような欧陽脩の認識から考えると、彼はむしろこの二つを異質のものとして考えていたのではないかと思われる。現代的な用語で言えば、欧陽脩は詩経を文学としての解釈することと経学として解釈することは別であると冷静に認識し、かつ、「聖人の志」という考え方を導入して、詩の道徳的な価値というのは、孔子によって詩の本来の意味の外側に附加されたものと考えて詩経の経典性を担保し、それによって詩経の実態に即した解釈（詩人の意）を行う自由を手に入れようとしたのではないだろうか。[27]

詩人は比喩として用いた事物を実見していたという認識は、以上のように彼の詩経解釈に大きく貢献した。しかし、彼には今一方で、修辞的な性格の強い比喩（決まり文句としての比喻）に対する発言も存在する。

詩人は「采葛」「采蕭」「采艾」など〔の比喩〕で、みなわずかのことも積もり積もればたくさんになるということを言う（王風「采葛」本義）

詩の王風鄭風およびこの唐風には「揚之水」が三篇あるが、いずれも波だった水の力が弱くて束ねられた薪を流すことができないことを言っているのに、この篇だけが波が激しくて汚れや濁りを洗い流すということを言うはずはない（唐風「揚之水」論）

ここには、同様の比喩は同様の意味を表すという考え方が見られ、むしろ常套表現としての比喩という性格が強い。はたして、詩人が実見していたということがすべての比喩についていえるのか、比喩の性質は一様にとらえられるものなのか。このことを考えるためには、彼が方法的に一般化して扱った「比」と「興」との違いを再検討する必要があるが、欧陽脩はそれを行わなかったので、最終的な結論には達することはなく、あいまいさを残したまま終わっている。この問題は彼以後の詩経学者に持ち越され、最終的に朱熹によって宋代詩経学を代表する賦比興論にまとめられたと考えられるのではないだろうか。朱熹の賦比興論については、はじめに述べたように莫礪鋒氏と檀作文氏の分析に詳しい[28]が、注目すべきは、興句の詠い起こしとしての機能を強調し、興句のみで意味を探るのではなく他の詩句との関係性を重視するなど、欧陽脩から触発されたと思われる点が存在することである。ここから考えると欧陽脩の比喩説は、宋代の詩経学の起点をなすものとして重要な位置を占めると言えよう。

注

(1) 近年公刊された専著として、裴普賢『欧陽脩詩本義研究』(一九八一、台湾、東大図書公司)、車行健『詩本義析論——以欧陽脩与龔橙詩義論述為中心——』(二〇〇二、台湾、里仁書局)などが挙げられる。

(2) 江口尚純氏「欧陽脩の詩経学」(『詩経研究』一九八七・一二)。氏は論文中で、欧陽脩の比と興の区別は必ずしも厳密ではなかったこと、詩人は一側面をとらえて比興すると彼が考えていたこと、旧説の牽強付会な比喩解釈を批判したことを指摘する。本稿は、氏の見方を実例を通して検証しさらに詳しく分析することによって、欧陽脩の比喩説を彼の詩経学の中に正当に位置づけることを目的とする。

(3) 潘嘯龍・蔣立甫『詩騒詩学与芸術』「論欧陽脩対『詩経』的文学研究」(二〇〇四・五、上海古籍出版社)。
(4) 莫礪鋒『朱熹文学研究』第五章「朱熹的詩経学」(南京大学学術文庫、二〇〇〇・五、南京大学出版社)。
(5) 檀作文『朱熹詩経学研究』(中国詩歌研究中心学術叢刊、二〇〇三・八、学苑出版社)。
(6) 『詩本義』は、巻一～一二で詩経の各篇ごとに、問題とすべき部分について古人の説を掲げながら論述を行った「論」と欧陽脩の考えに基づいて詩を通釈した「本義」を載せる。巻一三以後は、詩経をめぐる種々の問題についての専論を集める。
(7) 二〇〇二、北京大学出版社、第四～六冊。
(8) 『詩本義』中における「興」の用例を列挙する。ただし、この他に伝箋で「興」と言うのを引用したものがあるが、それは批判の対象としての引用であるので除外した。用例がはじめの数巻に偏っていることから、系統的に用いられてはいないことがわかる。また、用例がすべて「論」ではなく、欧陽脩が自分の説によって詩を通釈した「本義」の部分においてであるのは、「興」が比喩と意味との一対一対応の関係を表したものではなく、作者の言わんとすることを全体的に表現したものであるという筆者の考えを裏付けるものと考えられる。
①捕兔之人布其網罟於道路林木之下、肅肅然嚴整、使兔不能越逸、以興周南之君列其武夫為國守禦、赳赳然勇力、使姦民不得竊發爾（周南「兔罝」本義）
②誰謂雀無角、何以穿我屋者、以興事有非意而相干者（召南「行露」本義）
③梅之盛時、其實落者少而在者七。已而落者多而在者三。已而遂盡落矣。詩人因此以興物之盛時不可久、以言召南之人顧其男女方盛之年、懼其過時而至衰落、乃其求庶士以相婚姻也（召南「摽有梅」本義）
④濟盈不濡軌者、濟盈無不濡之理、而涉者貪於必進、自謂不濡、又興宣公貪於淫慾、身蹈罪惡而不自知也。雉鳴求其牡者、又興夫人不顧禮義而從宣公、如禽獸之相求、惟知雌雄為匹、而無親疏父子之別……凡涉水者淺則徒行、深則舟渡、而腰匏以涉者、水深而無舟、蓋急遽而蹈險者也。故詩人引以爲比（召南「匏有苦葉」本義）
⑤激揚之水、其力弱不能流移白石、以興昭公微弱、不能制曲沃、而桓叔之彊於晉國、如白石鑿鑿然見於水中爾。其民從而樂之（唐風「揚之水」本義）
(9) 『詩本義』中の「比」の用例は、国風十六、小雅九、大雅一（ただし、伝箋で比としているのを批判するために引用した

ものは除く）。

（10）前掲江口論文。

（11）欧陽脩のこの言葉は、陸徳明『経典釈文』「毛詩」序に、「興は是れ譬喩の名なり、意に尽くさざる所有り故に題して興という」に近く、説の継承関係を想定すべきかも知れない。

（12）前掲蔣氏論文。

（13）前掲蔣氏論文にもこの二例を引くが、重要な論点であるので本稿でも取り上げる。

（14）「毛伝が『興』を釈する時、基本的にはAがBを比喩するといういう一種の類比的比喩の構造モデルを採用している。……Aは詩文自身のある句群だが、Bは詩文自身の句群ではなく、毛伝が理解したいわゆる『経義』である」（前掲檀氏著書一五九頁）。

（15）鄧国光「唐代詩論抉原――孔穎達詩学」（『中華文史論叢』第五六輯、二二二頁）参照。

（16）この他周南「螽斯」でもこの比喩論に基づいて詩解釈を行っている。

（17）「毛鄭のごときは鳲鳩に均一の徳があるとし、またいわゆる『淑人君子』もまた三章に述べるごとく国の人々を正すにふさわしいというのだから、やはりその『心を用いること均一』なることを称賛していることになり、これでは詩序に『均一ならざるを刺る』といっているのと全く反対になってしまう。」

（18）前掲、江口氏論文および蔣氏論文参照。

（19）『正義』における「興取一象」の意義については、鄧氏前掲論文（二二三頁）がすでに指摘するところである。

（20）世界古典文学全集『陶淵明・文心雕龍』（一九六八、筑摩書房、三八五頁。

（21）ただし、劉勰は「關雎」では「別有り」、「鵲巣」では「貞一」を比喩の意味としてしているが、これは毛伝・鄭箋の解釈を踏襲したものと言える。

（22）例えば、鄭司農「興者託事於物、則興者起也。取譬引類起發已心。詩文諸舉草木鳥獸以見意者、皆興辭也」（「大序」、「故詩有六義焉…」正義）

（23）拙論「欧陽脩『詩本義』の揺籃としての『毛詩正義』」（宋代詩文研究会『橄欖』第九号、二〇〇〇）参照。

（24）これを彼の詩人としての特質から発したものと考えてもよいであろう。

(25)『欧陽文忠公集』巻四「酬學詩僧惟悟」詩に、「詩三百五篇、作者非一人。羈臣與棄妾、桑濮乃淫奔。其言或可取、疵雜不全純」と言う。

(26) 古詩の体、意深ければ則ち言緩やかにして、理勝てば則ち文簡なり（巻八、小雅「何人斯」論）。その他、小雅「四月」「何人斯」、大雅「蕩」などの「論」にも同様の説が見える。

(27) 欧陽脩には、詩の本来の意味とそれに現実社会の要請から付与された意義とが併存するという思考があり、後者にも場合によっては存在意義を認めていた。彼が「末義」と考える「経師の業」についても、巻九、小雅「青蠅」論に「鄭氏長於禮學。其以禮家之説曲爲附會詩人之意、本未必然」と、鄭玄が礼制による解釈で詩の本義をとらえ損なったと批判しながら、「義或可通、亦不爲害也。學者當自擇之」と学者がそれぞれの立場によって本義を取るか末義を取るかをまかせている。

(28) 拙論「詩の構造的理解と『詩人の視点』――王安石『詩経新義』の解釈理念と方法」（宋代詩文研究会『橄欖』第十二号、二〇〇四）で、欧陽脩と王安石の比喩説の関係について検討を加えているのも参照。